

ありし日のSF物語 — ふたりのパリ・シャ・・・

川口幸宏

1.



時は1961年、所はスコットランドの農場。一匹のメス猫が生まれた。数週間経ってメス猫の耳が前に折れ曲がっていることに飼い主は気付いた。気付きはしたが、おらかな飼い主は、それが病気によるものか、それとも、何らかの理由によって奇形となったのか、考えることなくメス猫家族とともに

楽しい日々を過ごした。ところが、そのメス猫が生んだ子どもの中にまた耳折れのメスがいたことによって、楽しい日々環境は一変する。

こうして、突然変異によって生まれた耳折れネコを初代として、その後、スコティッシュ・フォールド(Scottish-Fold。SFと略称。わが国では「スフ」とも言われる)種の名前が与えられ、繁殖に繁殖が重ねられていった。ぼくに言わせればネコにあるまじきその独特の風貌が人々を魅了したのだろう。耳折れネコを求め、耳折れ同士を掛け合わせる。生物学の優性遺伝の法則を知っていたかどうかまでは知らない。とにかく、耳折れの子どもがすべて耳折れであることを願って、繁殖を求めた。顔が丸く、クリクリオメメ、やや離れた目と目、丸っこい体型(ずんぐりむっくり型。やや小型。)、脚が太く短い、シッポの付け根から先までほぼ同じ太さなどなど、「カワイイ〜！」し、鳴き声も穏やか。我関せずというネコの性格は変わらないけれど、攻撃的でない。まあ、ネコの爪による傷跡を誇らしげに他人様に見せる程の野性ネコ好きにとっては物足りないほどの穏やかな性格である。

しかし、その繁殖の欲望が増大する一方で、外見の「美」、性格の「和」に反比例した内的な虚弱に気付きはじめた。骨に異常が現れる、それが原因で歩行が困難になる、腎臓疾患に罹るなどなど。それでは商品価値が劣る。それで人間は考えた。耳折れと非

耳折れとを掛け合わせる。つまり、耳折れは SF 種だから、SF 種とそれ以外とを掛け



合わせるということ。この場合だと耳折れも生まれるが非耳折れも生まれる。耳折れを高値で売り、非耳折れを安値で売る。優性遺伝の法則に従えば、非耳折れであれば、「耳折れ」に関してはまったく SF の遺伝子は含まれない。だが、ペットショップでは非耳折れネコに「SF 種の血が混じっている」「SF 種の親戚」などと

説明されることが多い。確かに、「耳折れ」以外の遺伝子は継承されているのだろうが、それが骨の異常だったり内臓疾患であったりすれば困ったものではある。その一方で、性格遺伝子が継承されていれば、野性ネコそのままの性格を好まない人にすれば、たまらなくかわいいのだろう。

仄間にしか過ぎないが、現在、SF 種誕生の故郷国では SF 種の繁殖は動物虐待に相当するとして、SF 種を誕生させることが禁止されているとか。その代わりというか、それ以外の国では SF 種繁殖専門のブリーダーが増加しつつある。つまり「カワイイ〜！」と嬌声を挙げる愛好家が増えているということになる。それでもやはり疾病・疾患・骨の異常を避ける傾向は強まっており、SF 種同士の交配は避けられていると聞く。

閑話休題：優性遺伝の法則。

「耳折れ」遺伝子（優性遺伝子）を X、「非耳折れ」遺伝子（劣性遺伝子）を Y とし、まず、A. 「耳折れ」を両親とする子どもの「耳折れ」の出現可能性を見ることにする。

- (1) $XX \times XX$ この場合、子どもはすべて「耳折れ」。その遺伝子は XX 。
- (2) $XX \times XY$ この場合、子どもはすべて「耳折れ」。その遺伝子は XX 、 XY 。
- (3) $XY \times XY$ この場合、子どもは「耳折れ」と「非耳折れ」。その遺伝子は、 XX 、 XY 、そして「非耳折れ」の YY 。

B. 「耳折れ」と「非耳折れ」とを両親とする子どもの「耳折れ」の出現可能性。

- (1) $XX \times YY$ この場合、子どもはすべて「耳折れ」。その遺伝子は XY 。
- (2) $XY \times YY$ この場合、子どもは「耳折れ」と「非耳折れ」。その遺伝子は XY 。

そして「非耳折れ」のYY。

これから見ると、現在のSF種誕生はB. — (2) によっている、と考えてよい。「丈夫でかわいいSFちゃん」を目指し、人間はかくも遺伝学の法則を生かし、改良に改良を重ねている、というわけだ。

しかし、SFはすでに人工種と言ってもかまわないだろう。

2.

10代前半に野良のメス猫を拾って飼ったことがあるだけのぼくが、あろうことか、2000年度の1年間、2匹の猫と一年間の同居生活を送った。しかも所はパリ、さらにさらに、そのネコたちは、一人がSF種であり、もう一人が非耳立ちのSF種であったのだ。SF種の名前はドララ、非耳立ちSF種の名前はトトロ。トトロが年上、ドララが1歳ほど年下。ドララは物怖じしない性格で、フランス国内の長旅の籠の中でも物音一つ立てない。そっと猫バックの蓋を開けて覗き込むと、大抵は眠り込んでいる。一方トトロは気が小さく、閉所恐怖症なのか、籠の中でか細くみゃーみゃー鳴き、鼻で蓋を開けるという芸当をやっているのける。普段は黒く輝いている鼻先が旅先では白くなってしまふ。つまり鼻先をすりむいているのだ。

仕事で机に向かっていると足下にすり寄ってくるものがある。かまわずに仕事を続けていると、今度は右肘をつんつんとつつく。トトロが鼻先でぼくにシグナルを送っているのだ。時には爪が隠された手で腕を彼の方にたぐり寄せるしぐさを何度かする。こうなるとおねだりとしか言いようがない。ぼくはおねだりに負けて、彼の傍に座る。彼は背筋をぴっと伸ばす。グルーミングの催促なのである。「おや、退屈したのかい？ジジはまだ仕事に退屈してないんだけどね。」と言いながら、頭からシッポの付け根にかけて、手のひらで丹念にさすってやる。彼は、やがて、手を前方に脚を後方に伸びきるだけ伸ばし、ぐるぐるぐるぐると、身体の底から喜びを伝えてくる。その時のトトロの目は写真のように、まさに満足げに細められている。そしてその姿勢で、何と、前進しているのだ。トトロが前進をはじめると、ドララがぼくの側に寄ってくる。そして身体をぼくにすりつける。「オヤ、ドララもグルーミング？」と声を掛け、空いている片方の手でドララの背をさする。ドララは、トトロと違って、匍匐（ほふく）しない。両手両足を床に突っ張ったままである。身体が硬いからである。間もなくトトロがグルーミングを嫌がりはじめ、その場を去る。そしてドララも。

室内が騒がしい。トトロが走り回っている。ぼくはこの「トトロの狂い走り」が始まると、仕事の手を休めてその様子を眺めることにしていた。賑やかすぎて仕事に集中できないこともあるけれども、いつもののんびりやのトトロとは思えないほどに俊敏で、机の下、ソファの上など、あり



とあらゆる障害をモノとはしない彼の走り振りの中に、微かながら、そのうち何かにぶつかるかもしれない、という、まことに失礼な期待の目を持って、彼の姿を追いかける。「トトロの狂い走り」のメは「壁上り」である。勢いよく壁に向かって走っていき、飛びかかり、その勢いで壁を上りはじめる。天井と床とのちょうど中間あたり 2メートル弱の高さの所でピタリと止まる。上に上ろうか下に降りようかと迷っているかのように、上下を繰り返し見、トンと床に飛び降りる。我がアパートの壁は布地で覆われているのである。一方、ドララは、トトロのその様子にまったく無頓着。大抵がソファの上で眠りこけている。たまに、トトロと同じように、高いところに上ることもあるが、それは壁ではなく、書棚であったり、飾り棚であったりする。一気に上ることはない。降りる時も一気に飛び降りることはない。脚が悪いことはそれで分かる。